

# 役場の対人援助論

(54)

岡崎 正明

(広島市)

## 研修を、企画してみた。

### 研修会はお好きですか？

「研修会」というものが、わりと好きである。受けるのも、あるいは話し手になったり、企画するのも。しかもどちらかというと、仕事で業務として義務的に関わるものより、自ら選択して費用を負担し、時間を作って参加する研修会の方が楽しめる気がする。

新しい知識や人との出会い。日常業務から離れ、非日常を味わえる。自分のおススメを、みんなに知ってもらえる。ちょっと元気がもらえたり、「悩んでるのはオイラだけじゃないんだな～」と、同じ穴のムジナ(?)を見て、なんだか安心したり。みんなで集まれる、お祭りみたいな雰囲気が好きなのかも？ただのイベント好き？なんて思わなくてもないが、会の大小や人数の多寡に関係なく、先を行く人の話を聴いたり、互いの思いや知恵を市場みたいに並べてアレコレとやりとりをする、そんな「開かれた場」の空気が好きである。

そうを言うと「熱心だねえ」「えらいね」などと褒めていただくことがあるが、それと同時に「私は休みの時間を使ってまではちょっと…」「いやー。そんな元気ないわ」「忙しくて」などという反応も結構セットでついてきたりする。まあそこは個人の人生であり、自由なのでとやかく言う立場にないのだが。でも、もし今の自分の仕事をそれなりに継続させるつもりで、できればより効果的な仕事ができたらそりゃ気分いいとか、上達したり感謝されたら嬉しいとか、やりがいも難しさも感じているようなら。無理のないペースでいいので、自分のために、自分にお金と時間を投じることは、やったらいいと思う。ただ“消費”するだけの楽しみも、それはそれでストレス解消にはなると思うが、そればかりだと虚しくなったり際限が無くなったりと、バランスが難しくなりがちだ。その点「自分への投資だ!」「成長につながっている!」と思えることは、罪悪感もなく、むしろ苦勞の根源に自ら打って出ている、前向きな気にさせてもらえる。そんな態度で生きていくことで、幸せになる確率が上がる例を結構見てきた。

研修会というのはスポーツで例えるなら「練習の場」だと思う。試合本番はあくまでゲンバ（現場）、日常業務の中である。試合経験を積むことで技が上達したり、体力がついたりする。多くの試合をこなすことで、「試合慣れ」することはもちろん、試合でしか学べないことがある。

ただし、やみくもに試合ばかりに出て、当たらないバットを振り、取れない球を追いかけるのも何だか違う気がするし、非効率ではないだろうか。試合の場を一旦離れ、コーチの助言や理論（講師の話）を聞いてコツやワザを学ぶ。自分のフォームの動画を見て弱点や悪い癖を理解し（振り返りや内省）、改善や能力向上のための擬似動作や反復運動を繰り返す（ロールプレイや事例検討）。そういう「練習」が個人の力量に及ぼす影響は、決して小さくないはずだ。練習を全くせずに試合で結果を出そうなんて、大谷やイチローが聞いたら鼻で笑われてしまうだろう。

そんなわけでこれまで受講したり、企画したり、ときには話し手となって研修に関わってきた回数は、少なく見積もっても年に10回以上。20年以上この界隈で働いているので、ゆうに3ケタは研修というものに参加してきたことになると思う。

そんな私が広島や山口・岡山など、児童相談所とその周辺に関わる勉強仲間の、通称SKB（せとうちあたりの家族支援勉強会）のメンバーと、1年以上前から企画し、準備をしてきた「第33回 児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助の実際研修会 山口大会」（長い！）が、2026年2月14日～15日に山口市で開催された。当日は、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から約200名の参加者が集まってくれ、懐かしい顔や新たなつながりに出会え、様々な刺激的で興味深い学びを得ることができた。

この会は30年以上前、当時の京都府や広島市の児相関係者が有志となって集い、誰に頼まれたのでも、業務上のノルマでも学会の当番でもなく、本当にやりたい者がやりたい想いで企画して始め、その後全国有志の手で受け継がれて続けてこられたという、なかなか稀有な研修会である。そして若き頃の私にこの業界の面白さを教えてくれ、様々なつながりをくれたとても大切な場所でもある。

そこで今回の「役場の対人援助論」は、この山口大会の企画に込めた思いや、無事終えた私の個人的な感想、嬉しかったエピソードなどについてレポートしたい。行こうと思っていたけど残念ながら来られなかった人、初めてこんな会があることを聞いた人など、様々なあると思うが、少しでもこの会の魅力が伝わればと思う。

## 研修会を準備する

そもそもこの研修会、学会や主催団体などの母体がない。そんなものが年に1回ペースでどうやって30年以上も続き、誰が次の開催地を決めるのか。初めて聞く人からすれば、全く想像がつかないだろう。

私も開始当初のことは知らないが、少なくとも最近は、長年この会に関わってきた中心メンバーが、目ぼしい候補先に「やってみない？」「おもしろいで！」「手伝うで！」と勧誘したり、その年の懇親会で、酒の勢いで興味がある人がうっかり手を上げたり…。まあ、特に決まったルールもないため、「やりたい！」「やります！」と言えば、周囲が「ドーゾ、ドーゾ」と促して決定するという、ダウ倶楽部みたいな流れなのだ。

そんなわけで（どんなわけだ）、昨年度の徳島大会の終わりに「やってみたら？」と声をかけられた私は、「SKBの仲間とだったら、面白い企画がやれるかも！」と盛り上が

り、山口の主要メンバーに「ぜひ山口でやらない！？湯田温泉行きたい！」と半分煩惱みたいなお願いをして、大会を引き受けることになった。二つ返事で「やりますか！」と言ってくれた山口メンバーの懐の深さに感謝しかないが、私の無茶ぶりのおかげで、会場は本当に湯田温泉すぐ近くとなり、参加者の多くは「美肌の湯」としても名高い温泉を楽しむことができたのだから、まあ私のワガママも結果的にファインプレーということになるだろう（自己弁護）。

私たちは1年前の3月頃から、月1回ペースでオンラインでの打ち合わせを重ね、役割分担やチラシの作成、分科会や全体会のコンセプト作り、講師の選定と依頼など、少しずつ準備をしてきた。

何事をやるにも「ヒト・モノ・カネ」が肝心といわれるが、研修会の準備も同様である。「ヒト」の部分で言えば、講師の多くが長年この研修会に関わってきた人たちや、会のコンセプトに理解を示してくれた人たちで、協力をお願いするとほぼ手弁当で集まってくれる。今回もそんな講師陣がたくさん集まってくれ、おかげで予算内で充実した内容のセッションを用意することができた。こんなことが実現できるこのネットワークこそ、この研修会の最大の強みであろう。

次に「モノ」の準備では、「ハコモノ＝適切な会場」を確保するというのが、実行委員会の大きな仕事のひとつとなる。会場は大きくて立派ならいいということでもなく、あまりに豪華だとそれだけ運営費がかさんでしまい、参加費が高騰してしまう。大学関係者にツテでもあると、キャンパスを低額で貸してもらえたりすることもあるが、毎度そんなに都合よきはいかない。予算を抑えようとすると、ホテルなどの民間施設より公共の施設が望ましいが、その分利用するのにいろいろな条件があったり、予約の競争率が高かったりする。この点は地元山口メンバーが本当に頑張ってくれ、書類作成や市の後援をとることで、利用料を抑えたりしてくれた。

最後に「カネ」だが、この会はどこからの補助も支援も得ていない（そこがこの会の自由度を保っている良さでもあるが）ため、純粋に参加者からの「参加費」だけが運営に当てられる費用となる。ようは参加者を一定以上集めることが必須で、「カネ＝ヒト」なのだ。そのため、この会の強みである顔の見えるネットワークを活用し、山口・岡山・広島の実行委員たちの地元での広報はもちろん、これまで会に参加したことのある方々へのお知らせと、そこからの宣伝や紹介をお願いするなど、「口コミ」での広がり大切に。ネット隆盛の時代だが、やはり人は知らないチラシやポスターだけ見るよりも、信頼する人から「これよかったよ」と言われた方が、心動かされるものである。もちろん全国の児童相談所に手分けしてFAXで案内を送付したり、児童養護施設や近隣市町村などの関係機関や団体、様々な会議や集まりの場へも広報を行い、少しでも多くの人に存在を知ってもらう努力も行った。

また、普段はオンラインでやりとりをする実行委員会のメンバー同士が顔を付き合わせて士気を高め、開催地・山口の機運を高めるため、2025年夏には山口県周南市でプレ企画としての研修会を開催。夜の懇親会では、本番に向けた様々なアイデアや想いを語り合い、「下見」という名目の下、山口のグルメやお酒を味わったりもした。ようは実行委員メンバー自身が楽しむことを大事にしたわけだが、これもこういう有志の会にとって大事なプロセスのような気がしている。

こうして約1年の準備期間を経て、山口大会は無事開催された。突然の解散総選挙も、数年ぶりの大寒波と大雪も、見事に1週間ズレってくれ、主要メンバーもインフルエンザに罹ることなく、当日を迎えることができたのだった。

## 山口大会レポート

準備のため開始 2 時間前に会場である「山口県健康づくりセンター」に入ったが、すでにご当地山口メンバーが中心になって、受付や会場づくりを進めてくれていた。私は自分が関わる分科会の部屋のチェック、書籍コーナーの準備や実行委員メンバーとの打ち合わせ、担当するオープニングセッションのリハなど、慌ただしく動いた。食事は作業しながらサンドイッチを頬張って済ませた。その間にも、懐かしい顔、わざわざ訪ねて来てくれた人、ずっとオンラインでやりとりしていてリアル対面は初めての人など、いろんな方と挨拶ができたのは心湧きたつ時間だった。

私が担当するオープニングセッションは「グループワーク『わたしをふるわす物語』』というタイトルの 1 時間程度のセッションで、大会の初めに緊張を解きほぐし、他の参加者との距離を縮めてもらうとともに、自分の仕事や人生への向き合い方について、少し思いを馳せてもらうことを目的に企画したものだ。

200 人ほどの参加者でいきなりグループワークということで、どこまでみんながついてきてくれるか心配もあったが、テーマが自分の好きな物語（本、映画、ドラマなど）という身近なものでもあり、大変盛り上がったように思う。こどもや家族の支援という領域で働く者同士、興味惹かれる作品が似通っていたり、意外な作品の紹介に心動かされたりと、新たな出会いやつながりのきっかけになったのなら、企画者として幸いである。

1 日目はその後 3 つの分科会に分かれて会が進行した。私が企画者として参加した分科会②は、「機関・立場・職種間の連携を『TIC』で考える ～トムとジェリーを目指して♪～」というタイトルで、よく言われる多機関や組織内での連携不全について、トラウマインフォームドケアの視点で想いを語り合い、自分の感情を味わうことで、葛藤や対立が生まれる関係を見つめ直し、それを乗り越える知恵や手法について考えるというものだった。京都府福知山児相の吉村拓美さんを講師に、リフレクティングトークを使って語り・聴くという実践を時間いっぱい行った。

私も TIC を知ることで、これまで関係機関や他職種へ腹を立てたり、無理解を一方向的に嘆いていたものが、「ひょっとしたら相手のあの反応の裏側には、傷つきや不安があるのかも？」と立ち止まったり、自分の感情についてもより詳細に言語化でき、消化できるようになったため、参加者のみんなとそうした感情や体験を共有でき、大変有意義な分科会になったと感じている。参加者からは「多くの方の発言を聴くことができた」「まずは自分が TIC でしなやかになっていけたら。エンパワメントされました」「TIC を連携に使う方法がとても納得」などの声をいただいた。

同時間の分科会①は「こどもの日々の生活を振り返る低いゴールから始めるライフストーリーワーク（LSW）」で、ライフストーリーワーク相談室の才村眞理さんを講師に、「真実告知」や「生き立ちの整理」など、重いテーマをこどもに伝えないといけないイメージが先行しがちな LSW を、もっと日々の生活を振り返るような『低いゴール』から始め、分かりやすく、楽しいものにしていくことを考えるものだった。また分科会③は「家族理解の特別授業:やまぐち編」と銘打って、この研修会でもお馴染みとなっている、家族心理臨床家で漫画家の団士郎さんが、アレコレと家族支援や人への支援について語りワークするセッションで、今回の大会で最も参加者の多い分科会となった。

初日の夜、山口スタッフの準備で 80 名以上が参加する懇親会が開催され、全国の児相とその周辺領域の仲間が交流する場が設けられたのも、とても印象的で嬉しい場面だった。夏の下見の成果もあり？この日の懇親会はプレ企画の懇親会のお店と同じ系列店で行われ、「瀬祭」など有名な山口のお酒と、瓦そばや長州鶏などの地元の名物が味わえ、

大盛り上がりの懇親会だった。そんな盛り上がりの後半。もうすぐお開きという時間に、私は1人の女性に声をかけられた。私よりも少し年配の関東の児相職員さんで、この会で何度か顔を合わせていたAさんだった。Aさんは今年度で退職を迎えられるとのもので、「この研修会で育ててもらって、助けてもらった思いがあって、お礼の思いもあって今回参加しました」「長年続けてもらって、ありがとうございました」ということを、私に言ってくれたのだった。私は別にこの会を長年続けてきた責任者でもなんでもなく、お礼を言われるような立場でもない。むしろAさんと同じような育ててもらった立場だが、こんな場面に立ち合わせてもらえたことが、大変光栄で嬉しかった。

二日目の午前、私が参加したのは、企画・進行を担当する分科会⑤「ジ。～事例の検討について～」だった。児童精神科医の岡田隆介さんと、元大阪市児相の心理職である、京都橘大学の宮井研治さんをスーパーバイザーとして、2つの事例検討をグループワークで行う企画で、いつも業務で行う事例検討を、もっと自由に、元気が出る新たな発見の場にしようと試みる会だった。

6人ほどのグループに分かれ、ジェノグラムだけで事例家族について想像することから、保護者やこどもがこれまで持っている、「自らを説明するストーリー（そもそも私はこういう人生を生きてきて、こういう人間で、だからこんな問題があって、きっとこれからもこうだろうといった仮説）」や、そのストーリーを描き変え得る、見過ごされた事実から描かれる別のストーリーについて話し合った。その後、岡田さんからストーリーを描き変えるときに起こる脳の動きや、どうすれば変化が起きるのかのミニ講義があり、後半は対象者のストーリーを描き変える手法のひとつとして、リフレクティングのロールプレイをグループごとに行った。

企画段階で欲張りな私がつい内容を詰め込み過ぎたこともあり、ペースが早過ぎて困る参加者も出てしまったり、全体的に消化不良な感じになってしまったことが大いに反省する点である。ただ事例提出者の2人が多様な意見を聴くことができ、ケースについて振り返ることができたことと喜んでくれたことと、岡田さんの講義や宮井さんのロールや助言などを通して、参加者が学びを得ることができ、アンケートでも「岡田 Dr の言葉がガンガン心に杭のように打ち込まれました」「ストレングスを見つけることや新たなストーリーを創ることで支援を考える場だった」「ジェノグラムだけで想像してみることは面白かった。リフレクティングの時間は心地よかった」などの感想も聞かれたことは、主催者として大変うれしかった。

同じ時間にあった別の分科会としては、分科会④が「次の一手を考える！（対バリブラス）」で、そだちと臨床研究会の菅野道英さん、衣斐哲臣さんが講師となり、家族療法のポイントを踏まえながらグループによる事例検討を行い、家族を見立てる練習や、対応のロールプレイを通して学ぶ企画であった。もうひとつの分科会⑥は「『児童相談所職員の採用・人材育成・定着支援事業』への参加から考える」というテーマで、静岡県内の児相職員である井戸美和さんと早野仁也さんが、PwC ジャパンの 水谷祐樹さんと共に、児童相談所における人材育成や定着支援の課題や今後のあり方について、参加者と一緒に深めていく企画だった。

午前の分科会が12:30に終わりお昼休憩となったが、今回の大会では特別に「ランチタイムセッション」が企画されていた。フィンランドの児童福祉分野で働くアンティライネン知里さんが、現地からオンラインで「幸福の国フィンランドの児童福祉事情」と題して、聴き手の北谷多樹子さんとのトークを展開しながら、フィンランドの児童福祉の状況について紹介してくれた。福祉先進国のイメージがあるフィンランドの日本とは

違う仕組みや、実は共通して抱える家族と子ども支える現場の課題など、私たちが普段当たり前とと思っている日本の普通が、あくまで地域限定のものであることを教えてくれる、とても視野を広げてくれる刺激的なトークセッションだった。

そして最後のセッション。午後の全体会では、『明日はもっといい日に、なるかなあ？』一ドラマを超える現場のリアル」と題し、葛飾区児相の浅田浩司さんと、港区児相の佐藤靖啓さん、そだちと臨床研究会の川畑隆さんによる講演&シンポジウムがあった。浅田さんは、フジテレビで放送された児童相談所が舞台となったドラマの監修として協力をした体験談を語ってくれたり、小手先のエビデンスではない、体当たりでとことん相手に付き合う情熱と直感のケースワーク遍歴について、真っ直ぐに語ってくれた。また、佐藤さんは富裕層が多い港区で経験した、新たな子どもと家庭を取り巻く課題について語り、それらを受けて川畑さんが感じたことや、通底する大切なことについて語ってくれ、かなり聴き応えのある2時間であった。

こうして研修会は無事終わった。この会は、スタッフが提供する側として会のお世話ばかりに追われるのではなく、参加費も払ってしっかり研修本体に参加し、スタッフこそ学びを得られるものにすることを大切にしている。今回、特にご当地である山口スタッフは誠実で、おもてなし精神が高く、なかなか十分に研修に参加できない面もあったかもしれないが、岡山や広島スタッフほか、当日手伝いを買って出てくれた多くの参加者の協力もあり、スタッフみんなが分科会やなんらかのセッションを受講できたことは、最初に「山口でやろうよ！」と言い出した者として、非常にホッとした部分だった。

また、次の開催候補地として、複数の方から手が上がる状況があったのも、嬉しい出来事だった。創設メンバーの1人である団士郎さんは「無理に続ける必要はない。続かなかったら止めたらええねん。でも、続くならできる限りやったらええ」といつも言い、次の開催候補地が出れば、「やったらええやんか！生きとれば協力するで！」と嬉しそうに背中を押してくれるのだった。

確かに無理に続けようとする、本来手段としていた研修会が目的化し、義務のようになってしまいかねない。やりたい人が集まり、自主的な動きが無理なく持続していく。このほうが健康的で、開催する方も受講する方も、きっと満足感が高いはずだ。だから無理して続ける必要はないとの意見には賛成だけど、それでも私はこの会が「ぜひ続いて欲しい！！」と強く願っている。それは業務上必須な研修が増えたり、児童虐待に関する学会が大規模化していく今だからこそ、この小さいけれど広く開かれた集まりが続く意味や役割がある気がしているからだ。

そんな思いを共有できる仲間と、今回無事研修会をやり遂げ、次へつないでいくことができこと。考えてみたらなかなかできることではないし、私は相当に運が良く、幸せな人間だと思う。これもひとえに実行委員会の仲間や講師のみなさん、協力してくれたすべての人々と、何より集ってくれた多くの参加者の方のおかげである。この場を借りて、心から感謝を伝えたい。本当に本当にありがとうございます！また来年、この研修会で会えることを願って！！